

ギュスターヴ・フローベール『感情教育』における非連続の連続、 消失の主題、そして空虚=場としてのエクリチュールについて

久保田 齊 也

今回の論考では、ギュスターヴ・フローベールの小説、『感情教育』を巡り、いくつかの考察をしてみたいと考えている。その考察とは、この論考のタイトルにもつけたように、『感情教育』における、エクリチュールの様態のひとつである非連続の連続、そしてその非連続の連続と関連付けることのできる消失の主題、そしてさらに、その非連続の連続と消失の主題から垣間見ることのできる空虚=場としてのエクリチュールについてとなるだろう。

1 非連続の連続

『感情教育』を読みつつ感じることになる、あたかも分断しながら繋がっているようなディスクールは、この小説の至る所に見出すことができ、このディスクールの特質について、いくつかの側面から考察を加えてみたいと思う。その側面とは、まったく言語的な事象にかかわることであり、それはつまり、ディスクールの始まりの唐突さ、因果関係の不在、出来事の個体化、出来事の並置、断片化のことであり、このような観点から、『感情教育』のディスクールの特質を明らかにしていきたい。

そこでまず、実際に、『感情教育』のテキストに視線を注いでみたいと思う。『感情教育』における主人公であるフレデリックが、ある晩パレ=ロワイヤル座に出かけ、そこで「工芸美術」の社主であり友人であるアルヌーが喪章をつけているのを見かけ、その翌日「工芸美術」に駆けつける、そしてそこでアルヌー夫人の安否を訊ねる際のテキストである。

ショーウィンドーの前にならべてある版画のなかから、急いで一枚とって金を払いながら、店員の若者にアルヌーさんが元気かどうか訊いてみた。

店員は答えた。

「いたって元気です。」

フレデリックは蒼ざめつつ重ねて、

「で、奥さんは？」

「奥さんもお元気です。」

フレデリックは、版画を持ち帰るのを忘れた。

冬が終わった。春には憂鬱もいくつか晴れて、試験の準備に取り掛かり、そして、中以下の成績で及第すると、そのあとノジャンへ発った。⁽¹⁾

この引用において窺えるように、主人公であるフレデリックは、パレ＝ロワイヤル座で喪章をつけたアルヌーを見かけ、その喪章がきっかけでアルヌー夫人の安否が気になり「工芸美術」を訪ねる、が、ここで注目したいのは、「工芸美術」での最後の場面における文章と、「工芸美術」の場面のあとに始まる文章とである。つまり、「フレデリックは、版画を持ち帰るのを忘れた。」という文章と、その次のパラグラフを異にし始まる「冬が終わった。」という文章の、その二つの文章の始まりの唐突さに注目したいと思う。フレデリックが、アルヌー夫人の安否を訊ねるのに対して、店員が答える個所の文章と、フレデリックが版画を持ち帰るのを忘れてしまうのを告げる文章との間、そして、版画を持ち帰るのを忘れてしまうことを告げる文章と、その次に続けて始まる「冬が終わった」ことを告げる文章との間には、なんら直接的な因果関係は告げられもせず、またそのような因果関係は生じておらず、そこには語りの位相と語りの速度が変化した文が分断しながら繋がっているさまを窺うことができる。つまりここには、「奥さんもお元気です。」という文と「フレデリックは、版画を持ち帰るのを忘れた。」という一文との間、そして、「フレデリックは、版画を持ち帰るのを忘れた。」という一文と、「冬が終わった。」という一文との間には、空白が生じ、切断そして間隙が生じている。ここにおいて、直接的な因果関係を欠いた二つの文がパラグラフを異にし並列し、唐突に生起しているのであり、ここには、非連続が生み出されているさまを窺うことができるだろう。「フレデリックは、版画を持ち帰るのを忘れた。」という一文と、「冬が終わった。」という一文の、出来事を告げる唐突なディスクールは、切断と空白、そして非連続を生み出すことになるのであり、これらの文を、出来事としてのディスクールと名付けることもできるかもしれない。

そしてさらに、分断しながら継起してゆく非連続の連続というディスクールの様相は、『感情教育』の第3部第5章の最後の場面で目撃することができる。その場面とは、ノジャンからパリに戻ったフレデリックが、友人であり善良な共和主義者であるデュサルディエが第二帝政下の警官に殺害されるところを目撃する個所であり、その警官とは教条主義的な共和主義者であったセネカルだったと告げられる場面である。

騎兵の突撃の合間をぬって、警官隊が現われ、群衆を通りへ押し込めようとした。

が、トルトニの階段に、離れたところからでも目に付く背の高い男が、人像柱のように身動きもせず立ちつくしていた。——デュサルディエである。

三角帽を目深にかぶり、先頭に立って歩いていた警官隊のひとりが、剣で彼を威嚇した。

そのとき、デュサルディエは一步前へ踏み出し、大声で叫んだ。

「共和国万歳！」

彼は、両腕を十字の形にして、仰向けに倒れた。

群衆のあいだからどっと恐怖の叫びが起こった。警官は周囲を睨みまわした。フレデリックは啞然とした。その警官はセネカルだった。⁽²⁾

この引用の場面では、善良な共和主義者であるデュサルディエが、教条主義的な革命家から第二帝政下での警官へと変貌したセネカルに殺害されるところが活写されている。ここで注目したいのは、ひとつひとつの動作そして出来事が、周囲から隔絶し、ひとつひとつ個体化しているという事態である。それぞれの出来事が個体化し周囲から隔絶されることで、これら出来事は瞬間性を獲得することになり、これら出来事の間には切断が生じ空白が生み出され、そこで出来事の継起は、非連続の連続という様相を帯びることになる。空白、切断、間隙を含んだ出来事とともに、分断されながら継起してゆくという非連続の連続という時間が、そこには流れることになるのである。

そして、この出来事の個体化と非連続の連続性はまた、単純過去の連続的使用、つまり、動作を点としてとらえる点括相の機能を持つ単純過去の連続的使用によるものでもあり、さらに、この個体化と非連続の連続性はまた、出来事の主体である主語のたたみかけるような変化、つまり、引用の最後の個所で短い文章が四つ続くが、その四つの短い文章の主語が、デュサルディエ、恐怖の叫び、警官そしてフレデリックと、目くるめく連続的に変化することにもよるのであり、これら言語的事象により、『感情教育』のディスクールは、非連続の連続という様相を獲得することになる。

そして、セネカルによるデュサルディエの殺害というこの引用の場面によって、第3部第5章は幕を閉じ、ついで第6章が始まることになる。第5章の最後のデュサルディエの殺害の場面から第6章の始まりの間には16年の歳月が流れており、この16年をフローベールは、第6章の冒頭で、わずか数行で描いている。

彼は旅に出た。

憂鬱な旅、テントの下の寒々とした目覚め、茫然とわれを忘れてしまうような眺望や廃墟、生まれかけて中断した友情の苦い後味、を経験した。

彼は旅から帰った。

それからまた社交界にも出入りしたし、別の色恋もやってみた。(…)何年もの歳月が流れ去った。⁽³⁾

ここには、フレデリックの人生のある一部である16年の歳月が、わずか数行によって描かれてい

る。この引用の個所において注目したいのは、ここにおいても、「旅に出た」、「経験した」、「戻った」、そして「月日が流れ去った」、と、出来事が分断されながら並置されているという事実である。ワンセンテンスでワンパラグラフを構成し、そこには何らの従属関係は不在である。ここにおいて、出来事の間には直接的な因果関係は不在であり、分断されている出来事が、唐突に何の脈絡もなく継起し、事実の並列的羅列として出来事が提示されている。これら出来事は、指向対象の充実性のもとに、透明さをともないつつ提示されることになるが、しかしこの透明さは、出来事と出来事とのあいだに穿たれた間隙により、不透明なイメージへと変貌してしまう。つまり、指向対象の充実性により、透明さがいったん確保され、透明な過剰さへと至ることになるが、因果関係といった論理的説明を欠いた、出来事としてのディスクールの並置によって、出来事の間には切断が生じ、この透明さは、非連続を含んだ不透明さをまとったイメージと化してしまうことになる。そして、不透明さをまとうイメージと化したディスクールは、空白そして間隙を含み、非連続の連続という様相を呈し、物語は断片化してゆくことになるのだ。

『感情教育』の特質のひとつである非連続の連続というディスクールは、切断、間隙そして空虚をその効果としてもたらす、純粋に言語的事象にかかわる事態なのであるが、この切断や間隙そして空白を、ネガとして垣間見せてくれる言語的事象が、『感情教育』のテキストの至る所に見出すことができる。その言語的事象とは、接続詞 et（そして）の使用である。接続詞 et は、同質のものであれ異質のものであれ、ある語とある語を、またはある文とある文を結合する機能を持つものであり、そこでは説明を付加したりすることに使用されたりすることもある。しかし、フローベールにあっては、そればかりでなく、それとは別の事態が加わっているかのようなのだ。つまり、あたかも言葉と言葉の接ぎ穂に困惑しているかのように、et という接続詞が零れ落ちてくるのであり、そこでは、新たな情報が付け加えられたり均質性を獲得することなく、言葉と言葉の間隙を間隙のままに繋ぐものとしての et が機能しているのである。

十五分後、偶然であるかのように、乗合馬車の発着所へ入って行きたくなった。もしかしたら、また会えるかもしれない。

『会えたところでどうなる?』と思い返した。

そして軽装四輪馬車が彼を運び去った。⁽⁴⁾

この引用においても窺えるように、フレデリックが心のなかでひとり思ったことと、四輪馬車がフレデリックを運び去る出来事との間には断絶があり、ずれが入りこんでいる。ここで接続詞 et は、その断絶を橋渡しするような機能を持ち合わせているのだが、この橋渡しは、断絶を覆い隠してしまうどころか、かえってその断絶、間隙そしてずれを、ネガとして垣間見せ露呈させることに貢献しているのである。

この小説の至る所に見出すことのできる、こうした接続詞 et の機能を、もう一つ示してみよう。アルヌー夫人がフレデリックから決定的に去っていく場面である。

夫人が出ていってしまうと、フレデリックは窓を開けた。アルヌー夫人は歩道に立ち、合図をして辻馬車を呼んだ。彼女はその馬車に乗りこんだ。馬車は消え去った。
そしてこれがすべてだった。⁽⁵⁾

この引用が示しているように、アルヌー夫人は、フレデリックのもとを、馬車で決定的に去ってゆく。「馬車は消え去った」。その馬車の消え去りという切断としての出来事のすぐあと、その切断を切断のままに接続詞 et が現われ、そこには不透明なイメージが漂いながら、接続詞 et の背後に、間隙とずれが垣間見られるのであり、その意味において、接続詞 et の機能を、非連続の連続の一樣態とみることができよう。この接続詞は、たんなる付加や均質化を求めるものではなく、むしろ逆説的にも、切断や間隙、空白やずれの指標となるものであり、こうしたこの接続詞 et の機能を、『感情教育』の至る所で目撃することができるのだ。⁽⁶⁾

これまで見てきたように、唐突さ、出来事の個体化、出来事の並置、直接的な因果関係の不在、断片化といった特徴を持つ非連続の連続というディスクール、そして接続詞 et に見られる、切断や間隙そして空白やずれの逆説的なネガとしての露呈といった非連続の連続というディスクールは、言語的事象にかかわる事態なのであり、こうして、そのディスクールのなかに、空白や切断、そして間隙、もしこういえることができるならば、空虚を含みもつことになるのである。

2 消失の主題

ここで、次のテーマ、消失の主題についてであるが、非連続の連続というディスクールによって生み出されることになる空白や空虚に、あたかも吸い込まれるかのように、消え去ってゆくものたちがある。そしてさらに、この消え去ってゆくものたちによってもまた、消え去りのあとに、匿名と化した無人空間、そして沈黙としての空虚が生み出されることになるのである。ここにおいても、『感情教育』のテキストに、実際に視線を注いでみよう。

そのテキストとはまず、小説の冒頭、ノジャンへと帰るフレデリックが、ヴィル＝ド＝モントロ号から見つめることになる光景の描写の場面である。

しばらくすると、四角い小塔をめぐらした、尖った屋根の城館が見えた。前面に花壇が広がっている。そして、後ろにはほの暗いアーケードのように、背の高い菩提樹に縁取られた並木道が、ずっと奥までつづいている。フレデリックは、この木陰にも思う人の姿をあるかせてみた。そのとき、箱植えのオレンジの木をあいだ、玄関前の石段に、若い男女があらわ

れた。と見る間に、すべては消えた。⁽⁷⁾

この引用の場面は、フレデリックが船上から眺めている光景の描写であるが、ここで、この光景のなかに、フレデリックが「思う人の姿」を歩かせてみたというその「思う人」とは、船上で幻のように出会った⁽⁸⁾アルヌー夫人のことを指している。アルヌー夫人をちょうどこの光景のなかに歩かせてみたそのとき、あたかもフレデリックとアルヌー夫人の分身でもあるかのように、若い男女があらわれる。ところが、フレデリックとアルヌー夫人の最後の決定的な決別を予告するかのように、この城館も、若い一組の男女も、見る間に、消え去ってってしまう。

そしてまた、この消え去りは、また別の個所、ノジャンへと帰るフレデリックが船を降り、馬車に乗り換えて故郷へと向かう場面において、目撃することができる。そのテキストを見てみることにする。

ブレに着くと、馬にカラス麦をあてがう暇を待たずに、ひとり、先に街道を歩いていった。アルヌーはあの人のことをマリと呼んでいた。「マリ！」と大声で叫んでみた。声は宙に消えた。⁽⁹⁾

この引用において見ることができるように、これから親しくなりたい人の遠さを、近さとして感じ取りたい気持ちにかられ、フレデリックは大声で「マリ！」と叫んではみる。しかし、『感情教育』の第3部第6章の最後で、アルヌー夫人はフレデリックのもとを馬車に乗り決定的に去って行ってしまったことを暗示するかのように、ここにあって、フレデリックの愛する人の名を呼ぶ叫びは、先ほどのフレデリックが船上から見つめていた光景と同じように、無時間的な虚空に、消え去って行ってしまうことになるのである。

さらに、この消失の主題は、フレデリックがダンプルーズ邸に出かけていき用を果たした、そのすぐ後の場面において窺うことができる。

フレデリックは、馬車と同時に、わきから正門のところへ来た。門の幅が十分に大きくなかったので、立って待っていた。馬車の若い女は、扉窓から身を乗り出して、門番に小声でなにか話していた。紫色のマントで覆われた、その女性の背中しか見えなかった。けれども、彼は、絹の総や笹縁で飾った空色の畝織張りの車内をのぞいた。車内には、いっぱい女の衣裳がひろがっていた。ふかふかしたクッションを置きめぐらしたようなこの小さな車室からは、イチハツの香りと、ほのかになまめいた貴婦人の香りらしいものが立ち昇ってきた。馭者が手綱をゆるめ、馬は突然、車よけの据え石すれすれに駆け出した。そしてすべてが消え去った。⁽¹⁰⁾

この引用に登場する女性とは、一時的に結ばれることにもなるダンブルーズ夫人であり、この引用では、フレデリックのダンブルーズ夫人に抱くイメージが、この女性の背中、衣裳、そして官能的な香りの描写で描かれている。これら描写が暗示するかのように、フレデリックは、ダンブルーズ夫人の愛人となりそして結婚までをも約束をするに至る。しかし、フレデリックとダンブルーズ夫人の二人の関係は、やがて決定的に決別をする時がやってくることになるのだが、あたかもこの決別を暗示するかのように、そして目の前で展開していることが幻であるかのように、またしてもすべては消え去ってしまうことになる。

そしてさらにまた、この消失の主題は、アルヌー夫人がフレデリックのところを久しぶりに訪れ、そしてこれを最後に、決定的に去ってゆく場面に見て取ることができる。

で、夫人は、母親のように、彼の額に接吻した。

それから何かを探すような素振りをみせ、鋏を貸して欲しいといった。

櫛をとった、真っ白な髪がほどけて垂れ落ちた。

夫人は、荒々しく、根もとから、長い髪を一房、切り取った。

「これを持っていてください。さようなら！」

夫人が出ていってしまうと、フレデリックは窓を開けた。アルヌー夫人は歩道に立ち、合図をして辻馬車を呼んだ。彼女はその馬車に乗りこんだ。馬車は消え去った。

そしてこれがすべてだった。⁽¹¹⁾

『感情教育』の第3部第6章からの引用なのだが、アルヌー夫人がフレデリックを久しぶりに訪れるこの場面は、テキストには、1867年3月の終わりのことと記されていることから、フレデリックが故郷へと向かう船上でアルヌー夫人を最初に目にした時から、すでに27年ほどの歳月が流れ去ることとなる。フレデリックとアルヌー夫人は、この久しぶりの再開に際し、改めて互いの愛を語り合い確かめ合うのであるが、結ばれることは決してなく、アルヌー夫人はフレデリックに自らの髪を一房残し、これを最後に決定的に去ってゆく。「馬車は消え去った」、「そしてこれがすべてだった」とテキストに記され、ある種の強度に支えられていたこの二人の再会の場面は、そしてさらにアルヌー夫人の馬車で消え去りは、その消え去りそのものによって、空虚な時間と空間が口をあげ、非在と実在のあわいを漂い残存する幻影＝イメージと化してしまうことになる。

消失の主題について、これまでいくつか引用してきたテキストから垣間見られるように、目の前に展開していたことが、透明な過剰さとして、あたかも手に触れることができない幻であるかのように消え去り、その消え去りそのものによって穿たれた空虚の上に、漂い残存する幻影＝イ

マージュとして、消え去りそのもののリアリティーを感じ取ることができる。そして、目の前に展開していたことが、突然消え去ってしまうことにより、沈黙そして深淵としての空虚な時間と空間が生み出されることになり、あるいはむしろ、時間そのもの空間そのものが現前し、匿名と化した存在に引き込まれてしまうかのような、不在そして空虚としての無人空間が、そこには生じてくることになるのである。

3 空虚=場としてのエクリチュール

非連続の連続、そして消失の主題について、これまで『感情教育』のテキストに即し検討してきたのだが、非連続の連続においても、ディスクールの始まりの唐突さ、出来事の個体化、出来事の並置、因果関係の不在、断片化といった特徴の効果として、空白や間隙、そして空虚が生み出され、消失の主題にあっても、目の前に展開していたことが突然消え去ってしまうことにより、非在と実在のあわいを漂う幻影=イメージとしてのリアリティーを獲得し、そこには沈黙そして深淵としての空虚がぼっかりと口をあけることになるさまを観察してきた。非連続の連続において生み出され、そして消失の主題においても生み出される空虚は、『感情教育』のいたるところに垣間見られるのであり、そこで、この小説のいたるところに横たわっている空白・空虚の現前という事態を、この小説のエクリチュールの特質として見ることができるのではないか、という思いが浮上してくる。そこで、『感情教育』のいたるところに見出すことのできるこの空白そして空虚の現前という事態を検討するに際し、プラトンが『ティマイオス』のなかで語ることになるコーラという概念ならぬ名を導入することにしたい。

プラトンは『ティマイオス』のなかで、宇宙を構成する三つの「種族」について述べている。一つ目は「モデル」であり、二つ目は「コピー」であり、そして三つ目が「コーラ」であるとされる。モデルとコピーは、物事に秩序を与えるロゴスの働きにかかわっている。アイデアでもあるモデルの物質への転写や模写によってコピーが作られるのであるが、このモデルとコピー、アイデアと模倣といった対立措定、つまりロゴスの世界を構成するプラトンの対立措定の及ばないところで、第三の種族であるコーラが言及される。コーラは、モデルともコピーとも、いかなる関係も持たないものとして登場してくるのであり、コーラは「母」のようなものと呼ばれたり「養い親」とも呼ばれたりすることになるのである。プラトンは次のように書いている。

それは、あらゆる生成の、いわば養い親のような受容者だということです…そのものは、いつでも同じものとして呼ばれなければなりません。何故なら、そのものは、自分自身の特性（もしくは機能）から離れることがまったくないからです。——何しろ、そのものは、いつでも、ありとあらゆるものを受け入れながら、また、そこへ入ってくるどんなものにも似た姿をも、どのようにしてもけっして帯びていないことはないからです。というのは、そのも

のは元来、すべてのものの印影の刻まれる地の台をなし、入ってくるものによって、動かされたり、さまざまな形を取ったりしているものなのでして…。(12)

ありとあらゆるものを受け入れながら、動かされ、入ってくるものによって、さまざまな形を取ることになる、受容の器としてのコーラ。そしてこのコーラについて注目したいことは、引用の個所で、コーラが、「すべてのものの印影の刻まれる地の台」をなす場所であると言われていることである。あらゆる存在を受け入れ、その存在の印影を刻みこみながら、それら存在の受容としての基底をなすものとしてのコーラ。存在を受容し包み込む空虚な場としてのコーラ。さらに、プラトンはこのように書く。

この場合、象られてつくられる像が見た目にありとあらゆる多様性を呈しなければならないことになっているのだとすると、そういう像がその中で象られて成立するところの、その当のもの（受容者）自身は、およそ自分がどこかから受け入れるはずのどんな姿とも無縁だといふのでなければ、受け入れるものとしての準備がよく整っていることにはならない、ということ。(13)

コーラは、「母」なるものとか「養い親」、あるいは「受容者」や「印影が刻まれる地の台」のように名づけられ呼ばれていたのであるが、この引用にみられるように、これら命名が遡行的に見出されたイメージであることに、とりあえず留意しておくことが大切だろうと思う。その点を踏まえたうえで、一切の本質を欠いたコーラの特質を、とりあえず、「印影が刻まれる地の台」として存在を受容し、その存在の基底をなし包み込む空虚な場として、特徴づけることができるだろう。

そして、この「印影が刻まれる地の台」という場、その場としての基底とは、『感情教育』が書かれることになるその言葉たちのつらなり、エクリチュールというその基底としての言葉のことではないのか。つまり、存在を受容し、その印影が刻み込まれる基底としてのコーラの存在様態と、『感情教育』のエクリチュールの基底としての言葉の様態とは、類似性があるように感じられるのだ。あらゆるものの存在を受け取り、それら存在の印影の刻みこまれる場としてのコーラは、それ自身が空虚であり空隙であるのであり、また『感情教育』のエクリチュールは、空虚に包み込まれながら空虚に穿たれ、間隙そして空隙を刻み込まれ、あらゆる存在や出来事が生成しては消滅していく受容体としての場を構成しているその点において、コーラの一形象としてのエクリチュールというものを考えることができるのではないか。

ここにおいて、空虚という場所ならぬ場所を介して、コーラと『感情教育』のエクリチュールが関連しあうことになる。もちろん、コーラと『感情教育』のエクリチュールが、その機能にお

いて、まったく同じものであるということとはできない。ただ、コーラにあっても、あらゆる存在を受け取り、それら存在の印影が刻まれる台としての空虚な空隙を含んだ場として機能するのであり、また、『感情教育』におけるエクリチュールにあっても、あらゆる出来事や存在が生成しては消滅し、空虚に包まれつつ空虚に穿たれ、空隙そして間隙を穿たれた場として機能するという点において、コーラと『感情教育』におけるエクリチュールは関連付けることができ、こうして、プラトンの『ティマイオス』に登場する概念ならぬ名としてのコーラを参照することにより、『感情教育』におけるエクリチュールの特質を、少しでも浮かび上がらせることができたのではないかと思う。

空虚に包み込まれつつ空虚に穿たれ、間隙そして空隙を刻み込まれたエクリチュール、あらゆる存在や出来事が生成しては消滅していく集積場としてのエクリチュール、つまり、空虚=場としてのエクリチュールとして、『感情教育』のエクリチュールの一つの特質と捉えることができるだろう。

このように、『感情教育』のいたるところで垣間見ることのできるこうした空虚が、沈黙そしてカオスとして提示されている『感情教育』のテキストを、最後にあげておきたい。

岩はしだいに数を増し、しまいには見渡すところ、どこもかしこも岩だらけになってきた。家のように立体のもの、舗石のようにひらたいものなどが、もたれあったり、うえへのしかかったり、合わさったりして、消滅したある都市のそれとは見分けのつかない途方もない廃墟のようだった。が、めちゃめちゃに入り乱れたものすごい岩の列なりを見ていると、むしろ火山噴火とか、洪水とか、知られざる大異変の跡のようにも思えてくる。フレデリックは、こういうものはこの世の始めからここにあり、この世の終わりまでこのまま残るだろうといった。⁽¹⁴⁾

「この世の始めからここにあり、この世の終わりまでこのまま残る」もの、つまり、この世界の始めと終わりを貫いて存在し続けるものとは、不在としての匿名と化した空間であり、それら空間を包み込む、沈黙そしてカオスとしての空虚ということができるかもしれない。

非連続の連続によって、その効果として空白・間隙そして空虚が生み出され、消失の主題によってもまた、目の前に展開していたものが突然消え去り、その消え去りによって空虚が生み出されることになるのであり、このように、『感情教育』のいたるところに垣間見ることのできる間隙そして空虚は、この小説のエクリチュールに穿たれ、空虚に包み込まれ、間隙そして空隙を刻み込まれた、空虚=場としてのエクリチュールを形作ることになる。

非連続の連続そして消失の主題に沿って、空白そして間隙、空隙そして空虚という主題系に導かれつつ、『感情教育』におけるエクリチュールの特質を考察してきた。そして、そのエクリ

チュールは、あらゆる出来事や存在が生成しては消滅する、間隙そして空隙を刻み込まれた、空虚＝場としてのエクリチュールとして、『感情教育』という小説に横たわっているのである。

注

- (1) Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Édition de Pierre-Marc de Biasi, Le Livre de Poche, Les Classiques de Poche, 2009, p.76. :

« [...], payant vite une des gravures étalées devant la montre, il demanda au garçon de boutique comment se portait M. Arnoux.

Le garçon répondit :

— Mais très bien !

Frédéric ajouta en pâliissant :

— Et Madame ?

— Madame aussi !

Frédéric oublia d'emporter sa gravure.

L'hiver se termina. Il fut moins triste au printemps, se mit à préparer son examen, et, l'ayant subi d'une façon médiocre, parit ensuite pour Nogent. »

- (2) *Ibid.*, p.614-615. :

« Entre les charges de cavalerie, des escouades de sergents de ville survenaient, pour faire refluer le monde dans les rues.

Mais, sur les marches de Tortoni, un homme, — Dussardier, — remarquable de loin à sa haute taille, restait sans plus bouger qu'une cariatide.

Un des agents qui marchait en tête, le tricorne sur les yeux, le menaça de son épée.

L'autre, alors, s'avançant d'un pas, se mit à crier :

— Vive la République !

Il tomba sur le dos, les bras en croix.

Un hurlement d'horreur s'éleva de la foule. L'agent fit un cercle autour de lui avec son regard ; et Frédéric, béant, reconnut Sénécals. »

- (3) *Ibid.*, p.615. :

« Il voyagea.

Il connut la mélancolie des paquebots, les froids réveils sous la tente, l'étourdissement des paysages et des ruines, l'amertume des sympathies interrompues.

Il revint.

Il fréquenta le monde, et il eut d'autres amours encore. [...] Des années passèrent ; [...]. »

- (4) *Ibid.*, p.52-53. :

« Un quart d'heure après, il eut envie d'entrer comme par hasard dans la cour des diligences. Il la verrait encore, peut-être ?

« À quoi bon ? » se dit-il.

Et l'américaine l'emporta. »

- (5) *Ibid.*, p.621. :

« Quand elle fut sortie, Frédéric ouvrit sa fenêtre. Mme Arnoux, sur le trottoir, fit signe d'avancer à un fiacre qui passait. Elle monta dedans. La voiture disparut.

Et ce fut tout. »

- (6) 参考までに、ブルーストは、1920年に出版された雑誌『N. R. F.』における「フローベールの「文体」について」という論文のなかで、接続詞 *et* の機能について、次のように説明している。「[そして (*et*)] という接続詞は、文法の指定する目的を全然そなえていない。それはリズムの一単位のなかでの休止のしるしであり、一つの風景を分割するものなのだ。」(ブルースト、鈴木道彦訳、「フローベールの「文体」について」『フローベール全集』別巻所収、筑摩書房、1968年、8頁。) « La conjonction « *et* » n'a nullement dans Flaubert l'objet que la grammaire lui assigne. Elle marque une pause dans une mesure rythmique et divise un tableau. » (Marcel Proust, À PROPOS DU « STYLE » DE FLAUBERT, dans CONTRE SAINTE-BEUVE, édition établie par PIERRE CLARAC avec la collaboration d'YVES SANDRE, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, p.591.)
- (7) *Ibid.*, p.51. :
« Un peu plus loin, on découvrit un château, à toit pointu, avec des tourelles carrées. Un parterre de fleurs s'étalait devant sa façade ; et des avenues s'enfonçaient, comme des voûtes noires, sous les hauts tilleuls. Il se la figura passant au bord des charmilles. À ce moment, une jeune dame et un jeune homme se montrèrent sur le perron, entre les caisses d'orangers. Puis tout disparut. »
- (8) 主人公フレデリックは、ヴィル＝ド＝モンロー号でノジャンへと赴く際に、その船上でアルヌー夫人と出会うのであるが、その出会いの場面を、フローベールは次のように描写している：「それは幻のようであった。」、「Ce fut comme une apparition : »
消失の主題において、目の前に展開していた事柄の消え去りにより、あたかも起こっていた事柄が幻でもあるかのように、その非在と実在のあわいに幻影＝イメージが漂い出すことになるのだが、こうした事態が、出来事そのものが幻のようであるという点において、フレデリックの前に現れたアルヌー夫人の出現が幻のようだったという事態と、興味深い呼応をなしていることにも注目しておきたい。消失とは、あたかも幻のようであり、また出現はあたかも幻のようなのだ。(フランス語においては、出現と幻は、*apparition*、という一語において表現されるのであり、その点において、つまり出現＝幻ともいうことができる。) なお、幻をめぐる、マラルメに関する川瀬武夫の研究論考がある。(『《まぼろし》について——マラルメ初期詩編註解(4)——』、『ETUDES FRANÇAISES』早稲田フランス語フランス文学論集、no19、2012年、173-194頁)
- (9) Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Édition de Pierre-Marc de Biasi, Le Livre de Poche, Les Classiques de Poche, 2009, p.53. :
« À Bray, il n'attendit pas qu'on eût donné l'avoine, il alla devant, sur la route, tout seul. Arnoux l'avait appelée « Marie ! » Il cria très haut « Marie ! » Sa voix se perdit dans l'air. »
- (10) *Ibid.*, p.68. :
« Frédéric, en même temps qu'elle [=la voiture], arriva de l'autre côté, sous la porte cochère. L'espace n'étant pas assez large, il fut contraint d'attendre. La jeune femme, penchée en dehors du vasistas, parlait tout bas au concierge. Il n'apercevait que son dos, couvert d'une mante violette. Cependant, il plongeait dans l'intérieur de la voiture, tendue de reps bleu, avec des passementeries et des effilés de soie. Les vêtements de la dame l'emplissaient ; il s'échappait de cette petite boîte capitonnée un parfum d'iris, et comme une vague senteur d'élégances féminines. Le cocher lâcha les rênes, le cheval frôla la borne brusquement, et tout disparut. »
- (11) *Ibid.*, p.621. :
« Et elle le baisa au front comme une mère.
Mais elle parut chercher quelque chose, et lui demanda des ciseaux.
Elle défit son peigne ; tous ses cheveux blancs tombèrent.
Elle s'en coupa, brutalement, à la racine, une longue mèche.
— Gardez-les ! adieu ! »

Quand elle fut sortie, Frédéric ouvrit sa fenêtre. Mme Arnoux, sur le trottoir, fit signe d'avancer à un fiacre qui passait. Elle monta dedans. La voiture disparut.

Et ce fut tout. »

- (12) プラトン、種山恭子訳、『ティマイオス』（『プラトン全集12』所収）、岩波書店、1975年、75、78、79頁。
- (13) 同上、80頁。
- (14) Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, Édition de Pierre-Marc de Biasi, Le Livre de Poche, Les Classiques de Poche, 2009, p.484. :
« Elles [=roches] se multipliaient de plus en plus, et finissaient par emplir tout le paysage, cubiques comme des maisons, plates comme des dalles, s'étayant, se surplombant, se confondant, telles que les ruines méconnaissables et monstrueuses de quelque cité disparue. Mais la furie même de leur chaos fait plutôt rêver à des volcans, à des déluges, aux grands cataclysmes ignorés. Frédéric disait qu'elles étaient là depuis le commencement du monde et resteraient ainsi jusqu'à la fin ; [...]. »